

本書の構成

このドリルは、文章の〈要約〉力をつけるために編まれた、記述トレーニング用の問題集です。問題文はすべて一〇〇字以内で要約してください。

各問題の冒頭に、難易度の目安・制限時間を表示しました。

難易度レベル ★☆☆…基本

★★☆…標準

★★★…やや難

問題用紙の裏の右側には草稿用紙を付けました。下書きその他、自由に使用してください。裏の左側には問題文の続きが印刷されています。続きを読むにあたっては、問題用紙の右側を必要だけ折り曲げてください。用紙全体を裏返さずに要約文が書けます。

なお、1～23の上部の囲み数字(1・2…)は段落番号を、24～28の上部の数字は行数を表します。

別冊の〈解答・解説編〉には、問題文を再掲して文章構成等を図解しました。また〈論旨の構造／場面の展開／着眼点〉、〈要約へのアプローチ〉、〈解答例・配点〉を掲げ、読解における着眼点をチェックするとともに、自分でも答案を採点できるようにしてあります。担当の先生に採点していただくのがベストですが、やむを得ず自分で行う場合は、〈要約へのアプローチ〉の中に記した採点基準や、〈解答例・配点〉に掲げた部分点を十分参考にしてください。

さらに、著者のプロフィールや著書も紹介してありますので、ここを手がかりに学習の幅を広げてほしいと思います。

ここに収められた三十題に取り組むことで、文章読解力と記述表現力を養い、生き生きと学習していけることを願ってやみません。

本書の使い方

原則、担当の先生の指示に従って使用してください。  
なお、自習としてこの教材を使う場合は、以下の要領で取り組んでください。

① まず、本文と対照させ、問題文下段にある〈論旨の構造／場面の展開／着眼点チェック〉の空欄に語句を補ってください。〈論旨の構造〉〈場面の展開〉は、意味段落ごと、場面ごとの重要事項とその関係をまとめたものです。空欄に語句を補うことで、意味段落ごと、場面ごとの内容をしっかりと把握しましょう。

② 次に、問題文左側の解答用紙を使って全文の〈要約〉に挑戦してください。〈論旨の構造／場面の展開／着眼点〉で把握した内容を確認しながら作業をすすめましょう。

なお、★☆☆～★★★★☆の問題には、〈要約〉の手助けとなる語句

目次

◆ 本書の構成

◆ 本書の使い方

◆ 要約についての考え方

〈随筆・論説〉編

1 お客は偉くない……………有栖川有栖 1

2 遊行の門……………五木寛之 3

3 自由論……………内山節 5

4 王朝びとの四季……………西村亨 7

5 目を閉じて心開いて……………三宮麻由子 9

6 異文化の根っこ……………松本仁一 11

7 本を読む。ゆっくり読む。……………長田弘 13

8 「ことば」ほどおいしいものはない……………山根基世 15

9 和の思想……………長谷川權 17

10 読書の方法……………吉本隆明 19

11 いま「戦争」を考える……………早乙女勝元 21

12 「学び」の場はどこにあるのか……………汐見稔幸 23

13 「論理的」思考のすすめ……………石原武政 25

14 劇的とは……………木下順二 27

15 哲学の使い方……………鷲田清一 29

16 疑似科学入門……………池内了 31

17 貧乏クジ世代……………香山リカ 33

18 〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ……………鯨岡峻 35

19 〈希望〉の心理学……………白井利明 37

20 日本語の論理……………外山滋比古 39

21 図書館化する世界……………港千尋 41

22 情動の哲学入門……………信原幸弘 43

23 知の体力……………永田和宏 45

〈小説〉編

24 彼と私の本棚……………角田光代 47

25 クラスメイツ……………森絵都 49

26 夏帽子……………長野まゆみ 51

27 星々の悲しみ……………宮本輝 53

28 赤蛙……………島木健作 55

〈資料の読み取り〉編

29 人と接する際、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方か……………57

30 「ら抜き言葉」を使うかどうか……………59

が解答用紙に印刷されています。これをヒントに、できるだけ過不足なくマス目を埋めるようにしましょう。

- ③ 最後に、〈解答・解説編〉の〈論旨の構造／場面の展開／着眼点〉、〈要約へのアプローチ〉を参考に、自分の読解のあり方を確認し、答案を採点・添削（10点満点）してみましょう。

また、解答用紙にヒントが印刷されていた問題については、裏面の草稿用紙を利用するなどして、もう一度自分の力で要約文を書いてみましょう。

▽わからない言葉が出てきたら辞書で調べ、そのつど覚えていくようにしましょう。

▽しばらく日をおいてから読み直し、もう一度挑戦してみるのも効果的です。前に読んだときと比べて、確実に読解力が深まっていることを実感できるはずです。

——問題文は、さまざまなジャンルから成っています。繰り返し読むことで、テーマ・主題についての理解を深めることも、意義のある復習となるでしょう。

#### ◆要約についての考え方

〈要約〉とは、〈文章や話の重要な内容を選びとって、短くまとめること〉を意味します。

そして、〈要約〉には、〈大意の要約〉〈要旨（主旨および趣旨）の要約〉、それと関連する〈題名の提示〉といった種類があります。図示すると下記のような関係になります。

論旨とは〈論述されている内容およびその筋みち〉を意味し、それは〈解答・解説編〉の下段に示してあります。大意はその「論旨」を本文の展開に即して縮小したものです。そして、要旨はその「論旨」「大意」のなかの〈要となる内容〉を指し、本書ではその把握の練習をします。したがって、まずは、

- ① 筆者が、〈何について〳〵話題、問題〉〈どう述べているか〳〵主張、意見〉という核になる部分を読み取ろうと、強く意識して読んでいかなければなりません。

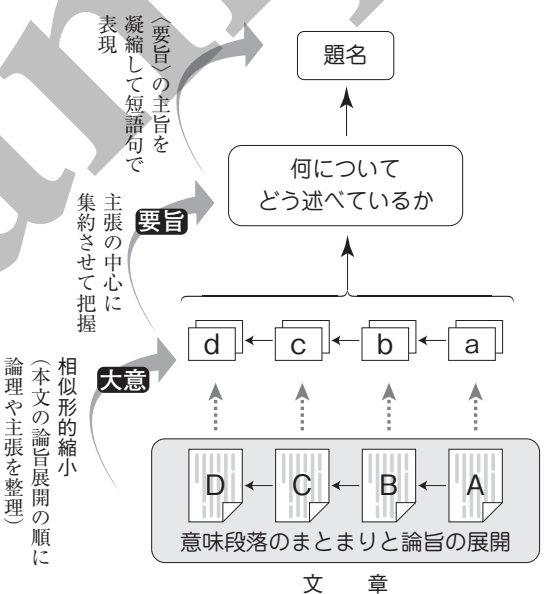
と同時に、筆者は、思いついたことを思いついたままにただ書き連ねているわけではありませんから、  
② 筆者が、①について述べるにあたって、〈どのように話の筋つまり論理を展開させていっているのか〉ということにも自覚的になる必要があります。

つまりは、①〈筆者のイタイコト〉と②〈論旨展開の構造〉という、この二点の把握が重要だということです。

入試現代文の問題文のほとんどは、長い文章の中のある特定の〈まとまりのある一部分〉を抜いて作られています。したがってそこには、〈序論・本論・結論〉〈起・承・転・結〉といった構成が見える場合もあり、それも〈要約〉の手がかりになるでしょう。しかし、全ての文章がそうした定まった構成をとるとは限りませんので、先の①と②の把握が最重要となるわけです。

小説の場合は、場面のまとまりを意識しながら、その展開を押さえ、〈ストーリー・あらすじ〉をとらえるとともに、話の山場となる〈心情〉を把握し、〈あらすじ〉＋〈テーマ〉という形で、どんな話なのかが明確になるよう、まとめていきましょう。

資料の読み取りの場合は、まずは①〈顕著な傾向として表れている事柄に注目〉し、②〈細部に表れている事柄にも着目〉していくという順序でデータを整理していきましょう。〈考え〉を要求されているときは、データから客観的に読み取れる範囲で普遍的な意見を添えていきましょう。



病の静養のため伊豆の温泉宿に滞在していた「私」は、ある日、道端の川の中洲なかすに一匹の赤蛙を見つけた。赤蛙は中洲から急流を泳いで向こう岸に渡ろうとしていた。

5 赤蛙は依然として同じことを繰り返している。はじめのうちは「これで六回、これで七回」などと面白がつて数えていた私は、そのうち数えることもやめてしまった。川の面の日射しひざしがかげり出す頃からは赤蛙の行動は何か必死な様相をさえも帯びてきた。再び取りかかる前の小休止の時間も段々短くなっていくようだった。一度はもうちょっとの所で向こう岸に取りつくかと思えたが、やはり流された。それが精魂を傾け尽くした最後だったかも知れない。それからには目に見えて力もなく脆く押し流されてしまうように見えた。坂を下る車の調子で力が尽きていくように見えた。

10 吹く風にもわかに冷たくなってきたし、私は諦めて立ち上がった。（注1）道風の雨蛙は飛びつくことに成功したがこの赤蛙はだめだろう……私は立って裾のあたりを払った。もう一度、最後に、川の面に眼をやった。

私は思わず眼を見張った。ほんのその数瞬の間に赤蛙は見えなくなってしまっていた。私はまた中洲の突端に取りついて浮かび上がる彼の姿を待っていたが、今度はいつまでたっても現れなかった。遂に成功して向こう岸にたどりついたのだとはどうしても思えなかった。私は未練らしく川のあちらこちらを何度も眺め廻したあとでとうとうそこを立ち去ってしまった。

15 しかし川に沿って下って、まだ（注2）五間けんと行かぬうちに、思いもかけぬところで再び彼と逢ったのである。

今度はすぐ眼の下、こっち岸に近いところだった。そこは水も深く大石が幾つもならんでいて、激して泡立った流れの余勢が、石と石との間で（注3）蕩揺ようゆしたり渦を作ったりしていた。そしてそういう石陰の深みの一つに赤蛙は落ち込んでいるのだった。こうなった順序は明らかだった。押し流される毎に中洲の突端にすがりついていた彼は、もうその力もなくなつて流されるがままになったのだ。洲をはさんで一つに合した水の流れは大きく強くなって、煽あおるような勢いで、こっち岸へ叩きつけてよこしたのだ。事態は赤蛙にとって、悲惨なことになるてしまっていた。彼は蕩揺する波に全く翻弄されつつある。辛うじて浮いているに過ぎぬようだが、それが彼の必死の姿であることは、彼の浮いている石陰のすぐ近くには渦巻があつて、絶えずそこへ彼を引きずり込もうとしていることからわかるのだった。彼に残された活路はたった一つきりだった。石に這い上がることである。だが、その石の面たるや殆ど直立はとんしていて、その上に水垢みずあかでてらてらに滑つくくなっているのだ。長い後肢あしも水中では跳躍力もきかず、無力に伸ばしたりかがめたりするのみだった。時々彼の前方

（裏面に続く）

場面1（15行目）

赤蛙は  同じことを繰り返している

赤蛙の行動は何か  をさえも帯びてきた

も段々短くなっていくようだった

一度はもうちょっとの所で  に取りつくかと思えたがやはり流された

最後だったかも知れない

押し流されてしまうように見えた

いくように見えた

赤蛙は  しまっていた

川の  を何度も眺め廻し

そこを立ち去った

場面2（16～38行目）

ところで再び彼と逢った

水も深く大石が幾つもならんでいて、激して

泡立った  が

石と石との間で蕩揺したり  を作ったりしていた

そういう石陰の  の一つに

赤蛙は落ち込んでいた

事態は赤蛙にとって、  に

なつてしまっていた

(注5) 無二無三——一心不亂。

この感じが来る、  
という事実が私を強く打った



(一〇〇字)

病の静養のため伊豆の温泉宿に滞在していた「私」は、ある日、道端の川の中洲なかすに一匹の赤蛙を見つけた。赤蛙は中洲から急流を泳いで向こう岸に渡ろうとしていた。

赤蛙は依然として同じことを繰り返している。はじめのうちは「これで六回、これで七回」などと面白がつて数えていた私は、そのうち数えることもやめてしまった。川の面の日射しひざしがかげり出す頃からは赤蛙の行動は何か必死な様相をさえも帯びてきた。再び取りかかる前の小休止の時間も段々短くなっていくようだった。一度はもうちょっとの所で向こう岸に取りつくかと思えたが、やはり流された。それが精魂を傾け尽くした最後だったかも知れない。それからには目に見えて力もなく脆く押し流されてしまうように見えた。坂を下る車の調子で力が尽きていくように見えた。

吹く風にもわかに冷たくなってきたし、私は諦めて立ち上がった。道風の雨蛙は飛びつくことに成功したがこの赤蛙はだめだろう……私は立つて裾のあたりを払った。もう一度、最後に、川の面に眼をやった。

私は思わず眼を見張った。ほんのその数瞬の間に赤蛙は見えなくなってしまっていた。私はまた中洲の突端に取りついて浮かび上がる彼の姿を待っていたが、今度はいつまでたっても現れなかった。遂に成功して向こう岸にたどりついたのだとはどうしても思えなかった。私は未練らしく川のあちらこちらを何度も眺め廻したあとでとうとうそこを立ち去ってしまった。

しかし川に沿うて下って、まだ五間と行かぬうちに、思いもかけぬところで再び彼と逢ったのである。

今度はすぐ眼の下、こっち岸に近いところだった。そこは水も深く大石が幾つもならんでいて、激して泡立った流れの余勢が、石と石との間で蕩揺したり渦を作ったりしていた。そしてそういう石陰の深みの一つに赤蛙は落ち込んでいるのだった。こうなった順序は明らかだった。押し流される毎に中洲の突端にすがりついていた彼は、もうその力もなくなつて流されるがままになったのだ。洲をはさんで一つに合した水の流れは大きく強くなつて、煽るような勢いで、こっち岸へ叩きつけてよこしたのだ。事態は赤蛙にとって、悲惨なことになってしまっていた。彼は蕩揺する波に全く翻弄されつつある。辛うじて浮いているに過ぎぬようだが、それが彼の必死の姿であることは、彼の浮いている石陰のすぐ近くには渦巻があつて、絶えずそこへ彼を引きずり込もうとしていることからもわかるのだった。彼に残された活路はたった一つきりだった。石に這い上がることである。だが、その石の面たるや殆ど直立していて、その上に水垢みずあかでてらたらに滑つこくなっているのだ。長い後肢も水中では跳躍力もきかず、無力に伸ばしたりかがめたりするのみだった。時々彼の前肢は石の小さな窪みに取りついたが、すぐにくるつと引つ繰り返つて紅い斑点のある黄色な腹を空しくもがいた。私は何か長い棒のようなものを差し伸べてやりたかったが、そんなものはあたりには見あたらなかった。今はただじっとその帰趨を見守っているばかりである。

やがて赤蛙は最後の飛びつきらしいものを石の窪みに向かって試みた。そうしてくるつとひっくりかえると黄色い腹を上にしたまま、何の抵抗らしいものも示さずに、むしろ静かに、すーと消えるようなおもむきで、渦巻のなかに呑みこまれていった。私は流れに沿うて小走りに走った。赤蛙が再び浮くかも知れぬ川面のあたりに眼をこらした。しかし彼は今度はもう二度と浮き上がってはこなかった。

私はあたりが急に死んだように静かになったのを感じた。事実にはわかに薄暗くもなっていた。私は歩きながらさっきからのことを考えつづけた。秋の夕べ、不可解な格闘を演じたあげく、精魂尽きて波間に没し去った赤蛙の運命は、滑稽というよりは悲劇的なもの

(裏面に続く)

## 場面の展開

場面1 川の向こう岸へ渡ろうとする赤蛙 (15行目)

赤蛙は 依然として 同じことを 繰り返している

赤蛙の行動は何か 必死な様相 をさえも 帯びてきた

小休止の時間 も段々短くなっていくよう だった

一度はもうちょっとの所で 向こう岸 に 取りつくかと思えたがやはり流された

精魂を傾け尽くした 最後だったかも知れない

力もなく脆く 押し流されて しまうように見えた

力が尽きて いくように見えた

赤蛙は 見えなくなって しまっていた

川の あちらこちら を何度も眺め廻し とうとう そこを立ち去った

場面2 流れに呑みこまれていった赤蛙 (16行目)

思いもかけぬ ところで再び彼と逢った

水も深く大石が幾つもならんでいて、激して 泡立った 流れの余勢 が

石と石との間で蕩揺したり 渦 を 作ったりしていた

そういう石陰の 深み の一つに

赤蛙は落ち込んでいる 悲惨なこと に

事態は赤蛙にとって、

悲慘なこと に

時々彼の前肢は石の 小さな窪み に 取りついたがすぐにくるつと引つ繰り返つて、 空しく もがいた

やがて赤蛙は最後の飛びつきらしいものを 石の窪み に向かって試みた

そうしてくるつとひっくりかえると、 黄色い腹を 上にした まま

何の 抵抗らしいもの も示さずに

むしろ 静かに 、すーと

消えるようなおもむき で

渦巻 のなかに呑みこまれていった

彼は今度はもう二度と 浮き上がって は なかった

場面3 赤蛙に対する「私」の思い (39行目)

秋の夕べ、 不可解な格闘 を演じたあげく

精魂尽きて 波間に没し去った赤蛙の運命

は、滑稽というよりは、

悲劇的なもの に思えた

に思えた。彼を駆り立てていたあの執念の原動力は一体何であったのだろう。それは依然  
 わからない。わかる筈もない。しかし私には本能的な生の衝動以上のものがあると思  
 えなかった。活動にはいる前にじつとうずくまっていた姿、急流に無二無三に突っ込  
 んでいった姿、洲の端につかまってほっとしていた姿、――すべてそこには表情があつた。  
 心理さえあつた。それらは人間の場合のようにこっちに伝わってきた。明確な目的意志に  
 もとづいて行動しているものからでなくてはあの感じは来ない。ましてや、あの波間に没  
 し去った最後の瞬間に至っては。そこには刀折れ、矢尽きた感じがあつた。力の限りに戦っ  
 て来、最後に運命に従順なものの姿があつた。そういうものだけが持つ静けささえあつた。  
 馬とか犬とか猫とかいうような人間生活のなかにいるあいつた動物ではないのだ。蛙なの  
 だ。蛙からさえこの感じが来る、というこの事実が私を強く打った。

← 本能的な生の衝動 以上のものがある  
 ← としか思えなかった  
 ← 明確な 目的意志 にもとづいて  
 行動している ものからでなくては  
 あの感じは来ない  
 ← 「ましてや」  
 波間に没し去った 最後の瞬間 に至っては  
 力の限り 戦つて来  
 最後に 運命に従順なもの の姿があつた  
 そういうものだけが持つ 静けさ さえあつた  
 ← 蛙からさえ この感じが来る、  
 という事実が私を強く打った

要約へのアプローチ

本文は、急流を泳いで向こう岸へと渡ろうとしていた赤蛙が最後  
 には波間に没していった様子を見守っていた「私」が、そこに悲劇  
 的なものを感じ取ったというこををつづったものである。話とすれ  
 ば、蛙が流れを渡り切れず力尽きて水中に没したというもののだが、  
 「私」が赤蛙に感情移入し、「彼」と呼ぶなど擬人化して見ているこ  
 とに着目しよう。前書きにもあるように、「私」は病を得て静養中  
 であり、赤蛙の行動に心打たれたのも、そうした「私」のある意味  
 で衰弱した様相が背景にあると考えられるが、ともかく「私」は蛙  
 という小動物に生の実相としてある「悲劇的なもの」を感受した  
 のだといえる。

＜テーマ（主題）＝訴えていることの中心＞が最後の「場面3」にあ  
 ることは比較的容易に察せられたであろう。主人公の心情の盛り上  
 がる部分や変化のありようが物語の中心テーマと重なるので、小説  
 を読む場合には、まずは主人公の心情の山場を押さえるということ  
 を念頭に置こう。そして、心情に着目できたら、その心情がどんな  
 出来事との関係からもたらされたものなのか、場面展開に即して出  
 来事を整理していくとよい。そうすれば、（こういう出来事が起きて、  
 人物がこのように思い感じた話だ）と整理でき、第三者に向けてわ  
 かるように説明することができるようになる。それが、要約にあた  
 ると考えればよい。そのやり方を踏まえれば、「場面3」の「私」の  
 心情の中心を、

・不可解な格闘を演じたあぐく、精魂尽きて波間に没し去った赤  
 蛙の運命は、悲劇的なものと思えた

←（より詳しい「私」の思いの説明）

① 1点分	向こう岸へ渡ろうと何度も挑み、最後には精魂尽きて静	① 1点分
③ 1点分	かに波間に没した赤蛙を見て、私は、目的意志をもつて	③ 1点分
③ 1点分	力の限り戦い、最後に、運命に従順に静かに死を受け入	③ 1点分
② 1点分	れていったその姿に悲劇的なものを感じ強く打たれた。	② 1点分

島木健作（しまぎけんさく）

一九〇三年―一九四五年。小説家。

主な作品 「癪」「再建」「生活の探求」「嵐のなか」  
 などがある。

出典 「赤蛙」の一節。

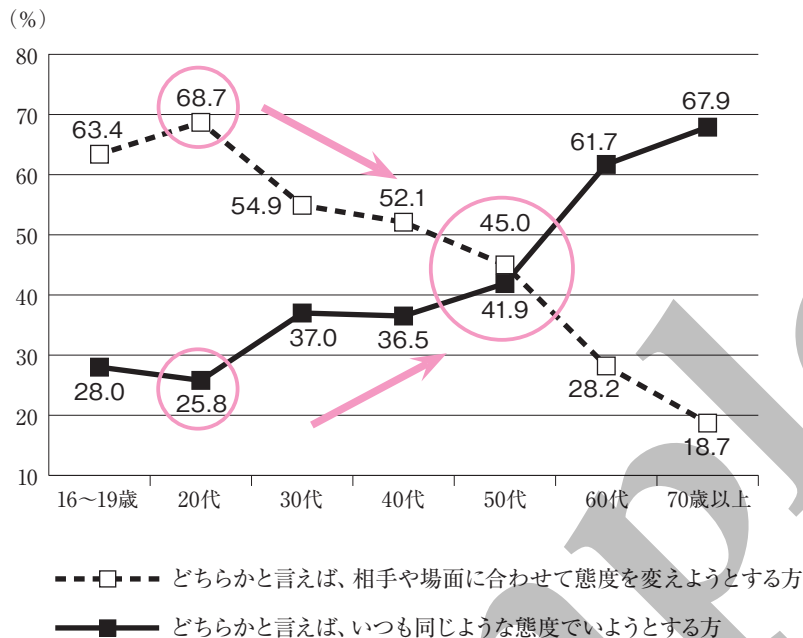
- ・明確な目的意志にもとづいて行動している
- ・波間に没し去った最後の瞬間に至っては、力の限り戦つて来、  
 最後に運命に従順なものの姿があつた
- ・そういうものだけが持つ静けささえあつた
- ←
- ・蛙からさえこの感じが来る、という事実が私を強く打った  
 と捉えた上で、これらの心情と直結してくる出来事を抽出するとい  
 う方向で〈あらすじ・ストーリー〉をまとめていく、ということに  
 なる。「場面1」や「場面2」で縷々描写がなされているが、一〇〇字  
 以内にまとめなければならぬので、縮約していかなければならぬ  
 い。右に掲げた項目の「不可解な格闘を演じたあぐく、精魂尽きて  
 波間に没し去った赤蛙」とすれば、「場面1」「場面2」での出来事を  
 簡潔に言い得たことになる。ただし、「不可解な格闘を演じたあぐく」  
 だけではわかりづらいので、場面に即して具体化する必要がある。  
 要約するにあたっては、
- ① 川を渡ることにも何度も挑み、精魂尽きて波間に没し去った赤  
 蛙に、……4点
- ② 悲劇的なものを感じ、強く打たれたことに触れ、……2点
- \* ③ その内実を、①の出来事との対応も考えつつ説明する  
 ……4点

という方向で考えていけばよいであろう。（\*は必須要素）

この場合、物語の中心的テーマは③にあたるので、③の趣旨が全  
 く出ていないものは、全体が0点となる。

次の図表は、文化庁が行った「国語に関する世論調査」において、コミュニケーションのあり方に関し「人と接する際、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方か」と質問したときの、回答結果の一部をグラフとして示したものである。

「どちらかと言えば、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方」をA、「どちらかと言えば、いつも同じような態度でいようとする方」をBとし、図表から気づくことを、あなたの考えを含めて一〇〇字以内でまとめなさい。なお、合計が一〇〇パーセントになっていないのは、「どちらとも言えない」「わからない」と回答した者もいたからである。



(文化庁「平成 25 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」から作成)

### 着眼点

- 資料を確認して、  
 (1) 顕著な傾向として表れている事柄に注目する

- ← (2) 細部に表れている事柄にも着目していくという手順で読み取っていく。

(1) の観点から、

[A] が右肩下がり、[B] が右肩上がりであること

A と B が [五〇] 代を境に [逆転] していること

に気づくはず。

だが、それだけにとどまらず、(2) の観点からも見ていくようにしよう。

A の最高値が [二〇] 代であり、B の

最低値もまた [二〇] 代であること

に気づけるかどうかのポイント。

設問は「あなたの考えを含めて一〇〇字以内」でまとめることを要求しているので、右の読み取りについて「あなたの考え」を示さなければならない。

[A] が右肩下がり、[B] が右肩上がりであること

A と B が [五〇] 代を境に [逆転] していること

にはどんな意味があるのか、それを自分なりに考えてみよう。年代が上がると頑固になる、保守的になるなどいろいろ考えられるであろうが、「頑固」「保守」と決めつけてしまっているものか。より包括的な表現でまとめているのがよいであろう。

また、

A の最高値が [二〇] 代であり、B の

最低値もまた [二〇] 代であること

には、どんな意味があるのだろうか。

[A] の数値が高く、[B] の数値が低いことから言えそうなることを考えてみよう。



まずは、どんなアンケートであっても、すべての人が回答者になっているわけではないということは意識しておこう。アンケートの対象母胎がどんな人たちから成るのかが、当然問題視されることになる。それゆえ、アンケートの対象母胎によっては結果としてのデータ、数値には偏差が生じ、それに違和感を抱く人も出てくるということになる。とはいえ、アンケートの対象母胎が広範化すれば、それなりの平均値が示されることもまた事実であろう。そんな前提に立って、データ資料に接していくようにしよう。

この問題で掲げられているのは、文化庁が行った「国語に関する世論調査」において、コミュニケーションのあり方に関し「人と接する際、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方か」と質問したときの、回答結果の一部をグラフとして示したものである。図表には、「どちらかと言えば、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方」、「どちらかと言えば、いつも同じような態度でいようとする方」という二つの回答結果が折れ線グラフで示されている。そして、設問の問いかけは、両者をA、Bに置き換えて「図表から気づくことを、あなたの考えを含めて一〇〇字以内でまとめなさい」というものである。

資料の読み取りにあたっては、

- (1) まずは、顕著な傾向として表れている事柄に注目する
  - (2) そのうち、細部に表れている事柄にも着目していく
- ということを心がけよう。一〇〇字以内でまとめることが要求されているので、どこまで言及できるか制約があるが、できるだけ右の(1)・(2)の考え方に即して忠実に考えていこう。

まず、図表から顕著にうかがえることは、  
・「どちらかと言えば、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方」≡Aが右肩下がりになっているのに対し、「どちらかと言

えば、いつも同じような態度でいようとする方」≡Bが右肩上がりになっていること

・さらに、両者が五〇代を境に逆転していること

の二点であろう。したがって、この二点には必ず触れる必要がある。この変化に「あなたの考え」（設問の要求）として意味を与えたとしたら、「年代が上がるほど、自分の考え方が固定的になり、それを譲らない傾向がある」といったことが言えるであろう。

だが、それだけで満足せず、Aの折れ線のピークが二〇代になっていること、またBの最低値も二〇代になっていることにも着目したい。つまり、二〇代の若者がいけば、〈相手や場面〉のことを気にしてそれに合わせようとしている」ということである。その点にも言及する形でまとめていきたい。

要約するにあたっては、

- \*① Aが年代ごとに下降線を描き、Bが上昇線を描いていること、  
……2点
  - \*② そして、AとBが五〇代で逆転していることを指摘するとともに、……2点
  - \*③ A・Bともに、二〇代の数値に特徴があることに触れ、  
……2点
  - \*④ ①および②の意味づけとして、年代が上がるほど自らの立場や考え方を堅持しようとする……2点
  - ⑤ ③の意味づけとして、二〇代の若者が「相手や場面」に合わせようとしていることに言及する……2点
- という方向で考えていけばよいであろう。（\*は必須要素）  
この場合、顕著な事柄としての①・②に触れ、それに対する考え方として④に関連した言及が必須となるので、それらの意味あいがかく出ていないものは、全体が0点となる。

年代が上がるほど自らの立場を堅持すると考えられる。	*④ 2点		*① 1点		*② 2点		*③ 1点	
	Aは二〇代をピークに下降線をたどるが、Bは二〇代を		最低値に次第に上昇し、両者は五〇代を境に逆転してい		る。		二〇代の若者が対人関係や場の雰囲気	
	に気をかけ、		二〇代の若者が対人関係や場の雰囲気		に気をかけ、		二〇代の若者が対人関係や場の雰囲気	
	に気をかけ、		二〇代の若者が対人関係や場の雰囲気		に気をかけ、		二〇代の若者が対人関係や場の雰囲気	
	に気をかけ、		二〇代の若者が対人関係や場の雰囲気		に気をかけ、		二〇代の若者が対人関係や場の雰囲気	